

上島洋一郎氏の発表についての

## 質疑応答

(質問者 1 名)

### 【質問】 田端信廣 (同志社大学)

(1) 「2. 体験の基礎づけ構造」の部分で、発表者は、ディルタイが「諸研究」(1905)を、かつて「多方面から否定的に受けとめられた『記述分析心理学の理念』(1894)の考察の正しさを改めて強調するべくまとめ」と記し(p. 5)、またフッサール『論理学研究』を援用することで、「自らの『記述分析心理学』に対する周囲からのかつての否定的評価を払しょくできると彼が期待した」(p. 6)とも述べている。

この評価は、「生の解釈学」にいたるディルタイの方法論的發展についての「通説的」理解と齟齬はないのか。すなわち、「通説的」な理解では、ディルタイはベルリン大学時代(1882-1905)に、M・ヴントの「説明的心理学」に対抗して、「記述的、分析的心理学」を提唱し、これをもって精神科学の定礎を企てていたが、後にはこの「心理学主義」を放棄して、「生の解釈学」の方法の確立へと進んだ、とされてきたように思う。

しかるに、発表者の記述からは、ディルタイ自身は後年に至るまで「記述的、分析的心理学」の有効性を確信していた(周囲が否定的評価を下しただけ)、と理解できる。すると、「通説的」理解が単純すぎるのか？あるいは、ディルタイ自身が(「生の解釈学」にとっての)「記述的、分析的心理学」の方法論的有效性を一貫して確信していたのか、あるいは晩年にその評価を変えたのか？その辺の背景的事情を教えてください。

(2) 発表の中心は、いわゆる理解をめぐる「部分と全体との解釈学的循環」を、生の「個別の体験」に適用される「意義カテゴリー」(=部分)と「体験連関の全体」に適用される「意味カテゴリー」(=全体)との循環に応用している点にあると考えられるが、その際、「解釈学的循環」の例示としてよくもちだされる、「芸術作品」や「哲学的著作」の理解をめぐる「部分と全体の循環」と、ここで語られている生の「実在的カテゴリー」としての「意義」と「意味」の「循環」過程とは——構造的形式上は同じだとしても——、具体的にはどのような点で異なっているのか？前者の「循環」に対する後者の「循環」の独自性があると考えれば、それはどこにあるのか？

(3) 発表(あるいは、ディルタイの主張)によれば、生の個別的「意義」も全体的「意味」も循環的過程のうちで、互いに他方によって「規定的でない仕方で規定されている(unbestimmt-bestimmt)」(p. 9; p. 11)。その際、「意義」に関する「未規定性」がなぜ生じ

るかは、p. 9で一応説明されているが、「意味」の「未規定性」の源泉についてはp. 11で明示的に語られていないように見える。歴史の全体の「意味」の「非閉鎖性」、その「意味」の絶えざる変容の可能性は、いわゆる「作用連関」との関係でどのように説明されるべきなのか？

**【回答】 上島洋一郎（関西大学）**

ご質問ありがとうございます。頂いたご質問内容を短く確認し、それぞれについてお答えいたしたく存じます。なお、今回は文章で質問にお答えする機会を得ましたので、質疑応答の時間で話せる文字数を想定しつつ、口頭説明よりも詳しくお答えするよう努めたいと存じます。

（質問1）

「記述分析心理学」から「生の解釈学」へのディルタイのいわゆる転回という図式について、発表者はどのように考えているのか。ディルタイは心理学の方法論的一貫性は後期においても保持していたのかどうか、また、その背景的事情はどうなっているのか。

（回答1）

解釈学については本発表の中では十分に触れることができませんでしたので、ご質問にお答えしながら本発表を捕捉したいと思います。

ご指摘のようにディルタイの思索変遷におけるいわゆる「転回」がディルタイ研究の一つの指標となる図式としてかつては機能していましたが、こうした図式的理解は当時利用可能であった資料状況および研究者らの研究関心に由来していたものでした。しかしその後、ディルタイの1890年代から1900年代の草稿群が『ディルタイ全集』（第19巻以降）によって公表されたことで、ディルタイ後期の心理学研究ないし心理学を踏まえた考察の存在が明らかになってきました。そうして今日ではディルタイのいわゆる転回を積極的に肯定することは難しいと多くの研究者に考えられています。例えば、心理学と解釈学の区別として用いられてきた従来の様々な二分法、すなわち、独立した個人の心理学と歴史社会の中での解釈学、内観法を介した心理学と表現を介した解釈学、言語を介しない心理学と言語を介する解釈学といった二分法に基づいて「ディルタイにおける心理学から解釈学への転回」が存在すると主張することは不可能であると研究者たちは考えています（Gudrun Kühne-Bertram/Frithjof Rodi (Hrsg.): *Dilthey und die Hermeneutische Wende in der Philosophie: Wirkungsgeschichtliche Aspekte seines Werkes*, Göttingen 2008.特に、Scholtz, Lessing, Kerckhoven, Kühne-Bertramの各論文を参照）。

以上のような研究状況と方向性を同じくする本発表はフッサール『論理学研究』へのディ

ルタイ理解を確認しながらディルタイ後期の心理学研究のありさまを追跡したのでした。なるほど、『記述分析心理学』(1994年)に対する批判(心理学者エビングハウスと哲学者ヴァインデルバントからの批判)を受けて1995年以降のディルタイが心理学の研究計画を中断し伝記や解釈学に関する考察を進めていく研究過程のなかに転回というドラマを読み取りたくもなりますが、しかし実際にはディルタイは自らが構想した記述分析心理学(および比較心理学)の妥当性を変わらずに確信していました。そこで本発表は彼がフッサールの『論理学研究』(1900/1年)を援用することで1905年のアカデミー発表(今回取り扱った論考「諸研究」)において自らの心理学に対する周囲の理解を得ようとしていた様子を確証したわけですが(ただし、今回の発表はポイントを絞ってあくまで理論的な考察に留めました。というのも、周囲からのディルタイへの批判とディルタイからの反論にはそれ取り巻く政治的背景も実は読み取れるため、実際の事情はより複雑だからです)。また、最晩年(1911年)の論考には心理学的研究がかなり減少しそれに代わって解釈学的研究が集中的に行われていますが、このことだけをもって心理学へのディルタイの確信が揺らいだとみなす証拠にはなりません、むしろディルタイは心理学を前提にしてここでも考察を進めていると発表者は見えています。

このようなわけで、ディルタイの思索のなかの転回という図式を私を含めて多くのディルタイ研究者はもはや受け入れていません。

#### (質問2)

①芸術作品や哲学的著作の理解における部分と全体の循環(解釈学的循環)と②意義と意味の循環の構造的形式は同じだとして、具体的にどのような違いがあるのか。また、前者に対する後者の独自性は何か。

#### (回答2)

①「部分と全体の解釈学的循環」と②「意義と意味の循環」の間には構造的形式の一致というより以上に密接な関係性があると発表者はみています。そもそも、意義と意味を含めた生のカテゴリーの議論とは、自然科学での形式カテゴリーと区別される精神科学に特有なカテゴリーの基礎づけを目的としたものでした。それゆえ、精神科学の領域における方法論である解釈学がもつ循環性の根拠は意義や意味などの生のカテゴリーに求められねばなりません。つまり、①芸術作品や哲学的著作に関する理解の方法論が解釈学の議論であるのに対し、②意義や意味などの生のカテゴリーはそうした解釈学のための認識論的論理的根拠づけの議論であるというのが両者の関係です。

さて、この整理を踏まえた上で意義と意味の循環の独自性について発表者がもう一つ強調しておきたいのは、このカテゴリーの適用範囲は精神科学の領域全体にまで広がるという点です。例えばある著作の理解に際し、その著作のなかのそれぞれの文章を部分であるの

に対してその全体にあたるものは著作全体の内容ということになるでしょうが、そこからさらに範囲を広げればこの著書を部分とする著者自身の人生を全体とみなすこともできます。同様に、そこから著作と著者を取り巻く当時の社会、さらには人類の歴史を「全体」とみなすことも可能でしょう（ディルタイの精神科学の基礎付けの目標はそうした普遍史を基礎づけることにありました）。これらそれぞれの段階において、部分と全体の理解において循環が成立しています。そしてディルタイは理解における意義と意味の循環性を立脚点にして、歴史全体を一元的確定的に規定しようとした形而上学的立場への批判を行ったのでした(p.11 以降)。

（質問3）意義の未規定性の源泉については発表で説明されているが、意味に関する未規定性（全体の非閉鎖性と全体の意味の絶えざる変容）の源泉については明示的でないように見える。後者の源泉がどこにあると考えているのか。またそれは作用連関との関係でどのように説明されるべきか。

（回答3）

ご指摘のように、意義の未規定性についての説明に比べて意味の未規定性についての発表者の説明は曖昧だったかもしれません。本発表での内容を改めて整理すると次のように説明できます。

本発表の中で発表者が或る全体の意味を確定的に規定する可能性として取り上げたのは、（1）全体が終了する場合（人生の終わりや歴史全体の終わり）と（2）ある種のイデオロギーによって歴史全体の意味を独断的に規定する場合でした（p.9-10）。しかし、そのいずれもがディルタイによって否定されたわけです。それは次のような議論でした。（1）ある個人の人生の意味を問う者がその個人とは別に存在する限り、その個人の人生の終焉（死）はその人生の意味の確定地点とはなりえず、また、歴史のまさに全体が終わるという反実仮想的な場合を想定したとしても、その全体を理解する我々が存在しないために理解が成立しない（全体はそれを理解する「我々にとって」存在する）。（2）ある種のイデオロギーを全体の意味として求めるならば、全体と部分の循環は存在しないどころかそもそも全体が存在しなくなってしまう（「全体が部分から理解される限りで全体は存在する」）。そして、意味と意義は相関的に規定しあう関係としてディルタイはとらえたのです（「全体と部分は揺れ動く」）。以上のことから、生の全体は決して閉鎖することがなく（生の非閉鎖性）、生の全体の意味がその部分の意義と相関関係であり続ける限り、意義と意味は未規定的な仕方規定される（意義と意味の絶えざる変容）というのがディルタイの主張でした。

次に、作用連関についてお答えします。まず、意義と意味との関連で作用連関の性格について改めて確認しておきます。ディルタイの説明では自然因果連関とは区別される作用連関はさしあたり心的生の構造論を出発点としていますが、そこからさらに個人とそれを取

り巻く歴史社会との関係としても規定されています(p.8)。そのいずれの次元でみるにせよ、その都度の作用連関の内実を規定するためには意味と意義というカテゴリーを我々は必要とします。したがって、ある人物の個別的体験がその人物の人生全体に対して作用しているならば、我々はそれぞれを意義と意味というカテゴリーによって理解するのです。

それでは、意味・意義・作用連関の関係をもう少し具体的にみてみたいと思います。なお、この作用連関が自然因果による影響関係を含んでいたとしても事情は変わらないと発表者は考えています(つまり、自然因果連関と作用連関の違いは自然因果しか含まない連関かそれともそれ以外のある種の影響も含む連関かの違いです。p.8. 脚注9の研究書も参照)。作用連関と自然因果の接点についての議論をデイルタイのテキストから読み解くのはかなり複雑な作業となりますが、ここでは意味・意義・作用連関の議論の輪郭を示すために次のような場合を考えてみます。例えば災害によって両足を失った人にとって災害は自然因果的にその人生に影響を与えるでしょう。両足を失ったその人にとって人生全体はこれまでとは異なってつらいものに見えてくるでしょう。しかし、その後、その体験によってむしろこれまでとは異なる喜ばしい人間関係を築くことができたとき、かの災害体験の持つ意義と人生の全体の意味は変容していくといえるでしょう。このようにある体験に働きかけるもの(作用)が自然因果であるかそれ以外のある種の影響であるかのいずれにせよ、体験と人生の中で作用連関が存在する限り、個別体験と人生全体は理解の対象となりえるのです。

以上のように見れば、我々にとって人生や歴史社会の全体がもつ非閉鎖性とそれらの理解の絶えざる変容性はそれら全体と作用関係にある個別の体験や出来事の理解を妨げることなく、むしろそうした全体と部分が相関しながら揺れ動き続けることこそがそれぞれについての理解の仕方の内実であると述べることができるでしょう。本発表が「動くものを動きながら掴む」というフレーズで象徴したかったのはこうした事態のことでした。そして、そうした内実にふさわしい認識論的論理的根拠をデイルタイは相関する意義と意味という二つのカテゴリーによって基礎づけたのだというのが本発表での結論でした。

質問に答える形で本発表の内容を改めて整理補足することができました。

ご質問に感謝いたします。